

私立東京医学校（一九〇四〜一〇） について

横川 弘 蔵

明治三十六年、従来の医師養成の道程に制度上大きな改
革が行われた。(一)明治三十六年三月二十日医師となるため
の医術開業試験が内務省より文部省に移管、(二)同年三月
二十七日公布の専門学校令により医学校は「高等ノ學術技
芸ヲ教授スル学校」―専門学校に依るものと制度化され、
すべて文部大臣の認可を経る事とし、さらに同三十七年三
月三十一日まで同令の条件を満たさないものは廃校と見做す
(同令第十五条)、が主なものであった。このような状況の
もと、明治三十六年八月三十一日済生学舎(舎長・長谷川
泰)の突然の廃校(東京府文書に廃校届は未見)、そして
学ぶ場を失った生徒達に九月一日「謹テ旧済生学舎生徒諸
君ニ告グ」なる檄文が出され、四日済生学舎同窓医学講習
会が組織された。これを母体として翌年三月私立東京医学

校の設立が認可された。このことは同年四月の私立日本医
学校、七月の私立東京女医学校の設立認可の先駆けであつ
た。今回私立東京医学校の設立と沿革を東京府文書をもと
に概略を述べる。

明治三十四年五月済生学舎に入・在学ができなくなった
女子生徒のために女子医学研修所(神田区三崎町二―九東
京歯科医学院)が設立された。所長は済生学舎教師石川清
忠(一八五四―一九一四)で、さらに石川は同三十六年済
生学舎廃校直後に設立された済生学舎同窓医学講習会(神
田区三崎町一―十一大成学舎)を主宰した。同年十月石川
の他飯盛挺三・竹崎季薫・曲淵景章を發起人とし東京医学
専門学校設立主意書が発表された。この頃一部の生徒が分
派、医学研究会ができた(私立日本医学校の前身)。同年
十二月同窓医学講習会は校舎を本郷区駒込千駄木町五九に
移転。校舎は二千余坪の敷地に新築二階建(建坪百四十余
坪)で、これは私立東京女学校(設立者折田重任・金澤卓
郎)が四月より下谷区東黒門町から移転予定のものであつ
た。翌三十七年一月女子医学研修所の生徒全員(五名)が
千駄木校舎に移り同窓医学講習会は男女共学となつた。

明治三十七年三月二十一日、私立東京医学校設立認可申請書及関係書類が設立者医師石川清忠の名で本郷区長を経て東京府知事千家尊福宛に提出された(三月二十三日受付)。

私立学校令施行細則に準じた申請書の内容から一部を要約する。(一)経費予算 総額年一万五千六百円、収入：授業料(生徒五百名) 一万五千元、入学金(新入生二百名) 六百円。支出：一万五千百円(予備費五百円)、そのうち主なものは約三分の二が人件費、病院費二千五百円、借地・借家料二千四百円で不足または臨時の場合は設立者が負担する。(二)学則「医学ヲ教授シ医師ヲ養成スル」を目的とし、入学資格は年齢十七歳以上で高等小学卒業、中学・高等女学校二年卒業またはこれと同等以上の学力があると認められたものとされ、修学年限四年、一学年は前・後の二学期に分けられた。学科課程は前期(一・二年)物理学・化学・解剖学・生理学・組織学の講義・実習各二四時間(計週四八時間)、後期(三・四年)病理学・病理解剖学・薬物学・内科学・外科学・産科婦人科学・眼科学・内外産眼科臨床講義・衛生学・法医学・細菌学(講義実習)で三年は二七時間、四年は三一時間(計週五八時間)、ドイツ語を

随意科(週四時間四ヵ年)とした。関係書類として石川清忠の履歴書と校舎・教室の見取図が付く(略)。

明治三十七年三月二十五日、東京府知事より私立学校令による各種学校として私立東京医学校の設立が認可された。認可理由に医学校は本来専門学校令に依り設立すべきものであるが、必ずしも同令に依らなくてもよいとの意の但書が付記されている。開校は申請書の追書に四月二十日を設定とあるが、実際は十五日といわれ、開校記念日は四月二十五日であった。同年四月九日設立者石川清忠を校長代理・主事とする申請が認可された。同年七月に外来診療所が、翌三十八年附属後豊病院(院長馬島永徳)が新設された。同四十年一月機関誌『東洋医事新報』創刊、編集・発行人氏原佐蔵(一八八四〜一九三二)、同誌は同四十二年十二月三十日号で廃刊。明治四十三年(一九一〇)三月初旬、私立日本医学校(校長山根正次)との合併交渉がはじまり、同月十九日合併が決定し、私立東京医学校の名は消えた。

生徒数を正確に算出することは難しいが、明治三十九年二月文部省が行った東京市内専門諸学校学生調によると、

明治三十八年九月現在の在校生は、専門学校入学資格のあるもの(中学・高等女学校四年卒業を指すものと思われる)二八名、資格のないもの二〇八名、計二三六名であった。(ちなみに私立日本医学校は三四七名であった)。

大正三年六月三十日、女子医学研修所・済生学会同窓医学講習会・私立東京医学校を主宰した石川清忠が東京大森の自宅で逝去した。私立東京医学校の六年の歩みは私立日本医学校に引き継がれ、大正八年八月同校は医術開業試験無試験の指定医学専門学校となった。

(東京都北区)

生誕百年を迎えた生理学者加藤元一

古川 明

生理学者加藤元一(一八九〇〜一九七九)は本年(平成二年)生誕百年を迎えた。彼の主なる研究は「神経麻醉部位の不減衰伝導学説」と「単一神経繊維の生態別出」である。また一九六五年に加藤が主宰した国際生理科学会議(東京都)は彼の晩年を飾る一大業績となった。昭和三十三年二月二十七日、加藤は岡山県新見市の名誉市民に推薦された。

加藤元一は明治二十三年二月十一日、新見町(現新見市)に生まれた。高梁中学校、第一高等学校を経て、大正五年京都帝国大学医科大学を卒業し、石川日出鶴丸教授の指導のもとに生理学を専攻した。大正七年彼は弱冠二十八歳で、新設の慶応義塾大学医学部の教授に任命され、生理学教室を開設した。当時神経の麻醉部位の興奮伝導は、ドイツのボン大学教授 Max Verworn の「減衰学説」が定説で